
Dark Town

白雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D a r k T o w n

【Nコード】

N 7 2 6 6 U

【作者名】

白雪

【あらすじ】

人の目に見えないものが見える少女紗依李には、自分の住む町を覆う黒い闇が見え、その闇に囚われるかのように心を失い狂っていく人々が見えた。

全てに絶望していた紗依李の前に一人の少女が現れる。「闇に犯された町を元に戻しに来たの」と言う彼女が紗依李の目には天使のようにも神のようにも映った。そんな二人の少女が立ち向かう巨大な敵。

彼女達は絶望した町を救う事が出来るのだろうか。

プロローグ（前書き）

小説紹介に使っていた文章は、プロローグに変換します（長いし、紹介で読みたい文章ではないかな・・・っと）

プロローグ

神々の世界が栄えていた時、神々はその地を離れ、別空間に一人一つずつ世界を作ることにした。

全ての世界が似て、異なるものだった。

ある世界は人間のみが知性を持つ世界。別の世界では・・・魔物が多く出現する世界。また、別の世界では魔法のある世界。そのまた別の世界には・・・人間以外の種族も知性を持つ世界。

神々は自分の作った世界に満足していた。

でも、ひとりの神が地におり世界に直接ふれたいと思うようになり、彼は下界に下りていった。

そこで出会った人間に魅せられた神は一人の子をなした。人間の世界・・・下界に神の子が生まれることで均衡が崩れた。

少しずつ大きくなっていくゆがみ。神々が手をこまねいている時・・・一人の少女が生を得た。そこから少しずつ世界が変わり始める。

1：天使の女の子？

けたたましい音の目覚まし時計を止めた賀茂紗依李さよりは大きく伸びをした。シンツと静まり返った家の中にいるためか、外の鳥のさえずりがやけに大きく聞こえる。紗依李はのろのろとした動作で体を起こした。冬の朝はできる限り長く布団の中にいたい。そう思うのは紗依李だけではないだろう。だが、学生という身分がそれを許してくれない。

「あー、学校行きたくない!？」

「その心は？」

「寒い」

紗依李は間髪いれずに答える。それに窓の外の人物はげらげらと笑い声を上げた。幼馴染の笹原源。彼の声が、紗依李が聞く1日の始まりの声となったのはもう、随分と昔の事だ。

「……ところで、源？入るならとっとと入ってよ。寒くてたまらない」

「はいはい。了解しました」

クスクスと笑いながら窓枠に足をかけた源はヒラリツと紗依李の部屋の中に入り込んできた。

「源。今日は食事当番源でしょう？着替えてから行くから用意しておいて」

「了解」

ニヤリと笑った源が部屋の外に出て行くのを見送った紗依李は、ボロボロの制服に手をかけた。泥と、血でボロボロとなった制服は、学校に入学して半年と少しという紗依李には些か似合わない。それでも、紗依李はそれに腕を通した。どうせ買い換えても意味は無いし、それを買うだけのお金をあの人たちが紗依李に与えてくれるとは思えない。食費を減らしてまでまた、すぐに汚くなる制服を買う気にもなれない。

「……私は大丈夫」

鏡に映った自分に目をやりながら、紗依李は小声で、何度も唱えた。言葉は魂が宿る。言霊の力がどれほどのものかは知らないが、それでも、紗依李が今、強く立っているためにはそれにすぎなければならぬ。そうしなければ、すぐにでもボロボロと涙をこぼし、学校へ行きたくないと駄々をこねてしまいそうだ。過保護な源にそれを知られれば、彼がどれだけ傷つくのか、想像に難くない。

「紗依李……用意できたぞ」

「今行く!？」

階下の源に呼びかけた紗依李は、最後に一度小声で呟いてから、小走りで部屋を後にした。

学校が近づくにつれ、紗依李と源の足は次第に遅くなっていった。同時に紗依李の表情から笑顔が消えていく。

「紗依李？大丈夫か？」

「平気・・・でも、やっぱり、あの色は気分が悪い」

紗依李は空中に漂う不思議な色を空ろな瞳で見つめた。紗依李は物心つく前から人には見えない不思議なものが見えていた。それが、何なのか幼い紗依李は自ずと理解していた。だが、紗依李がここ2、3ヶ月ほどこの青葉学園で見るようになった黒い靄は過去見たどれとも遠くかけ離れていた。初めは薄い灰色だったのが、だんだん黒くなっていつて、今では真つ黒だ。その中にぽつぽつ綺麗な色を持つ人間もいたが、それも今はほとんどがなりを潜めている。

源が心配そうに見ているのを感じ、紗依李は深呼吸をしてから源に笑顔に向けた。

「大丈夫だよ。大分慣れたし。源も、学校に着いたら自分の心配した方がいいよ。・・・あまり怪我しないだね。源に何かあったら、私は本当に一人なんだから。それだけは嫌」

「解っているよ」

柔らかな笑みを顔に浮かべた源に紗依李はどこか悲しげな笑みを浮かべた。そして、敵地におもむくような表情で、お互いの教室へと足を向ける。何も変わらない一日、何も変わらない苦痛の日々。それは卒業するまで続くと思っていた。その認識が崩れるのはそれからわずか30分後のことである。

2人にとって運命の出会いが今、訪れようとしていた。・・・そう、全てをかけた運命の時が。

源は教室に入ると、半分ゴミ箱となっている机の掃除に取り掛かった。それが、毎朝の彼の日課だ。

その様子をクラスメイトたちがクスクスと笑いながら眺めている。耳障りのその音も慣れてしまえば何とか耐えることが出来る。

机が片付くのと担任の野々宮杏里が教室に入ってくるのはほぼ同時だった。また普段と変わらない1日が始まるはずだったのに、その日は朝から様子が違った。

杏里の後に見慣れない少女が入ってきた。青葉学園の制服に身を包んでいる。綺麗で真新しい制服は源や紗依李の物とは似ても似つかない。彼女が誰なのか、気にしているのは源ただ1人らしい。杏里は横に立っている彼女に目もくれずにホームルームをはじめようとしたが、不意に視線を少女に向けた。

「あなた、いつまでそこに突っ立っているつもり？早く席に着きなさい」

恐らく転入生であろう彼女の紹介をするつもりは杏里には無いらしい。教師としての職務怠慢もいいところだが、それを間違っている

ると思っっているのも源だけなのだろう。誰も気にしていない。

源が入学したばかりはクラスも、学校も、教師もこうではなかった。友達もいて、楽しかったし、杏里は厳しい教師ではあったが、それはむかつくという風ではなく、教師の鏡といった感じだった。厳しいのに嫌われないそんな良い先生だったのだ。それが、何故こうなってしまったのか……。

「ここ、いい？」

源の前後左右の四方は開いている。わざわざ源から距離を置くために開けているのだ。そこに彼女は何の疑問も持たずに腰を下ろした。

彼女の髪の毛が大きく揺れ、源は目を細めた。彼女の髪の毛は淡い銀色をしている。自然に出る色だとは思えない。今の彼らであればそれをこれ幸いと責める材料としそうだが、源以外にその髪の毛の色に気がついている人間さえいなさそうだ。それが源にはひどく不思議だった。

「……転入生だよな」

「そう。自己紹介できなかったけど、愛染澄。よろしく」

「笹原源。よろしくな。……ここはこういうところだから、まともな扱いは諦めた方が……」

カッンという音と共に源の机でチョークがはじけた。杏里が物凄い形相で睨みつけてきていた。

「授業を受ける気が無いのなら、出て行きなさい」

「・・・どうもすみません」

澄はすぐに返事をしたが、その声が硬くなっていたような気がした。源に向けたのとは異なる、鋭い視線を杏里に向ける。

全てを拒絶し、どこかうんざりしているようなその表情は以前よく見ていた。昔、遠くから見ただけだったあの頃の紗依李と今の澄が源の中で重なった。だからなのかもしれない。源は無意識に口を開いた。

「愛染、俺の従妹に会ってくれない？」

「え？」

突然の言に驚いたように目をしばたいた澄は、一瞬杏里の方に視線を移し、彼女がこちらを見ていないのを確認してから小さく頷いた。

「わかった。・・・明日、放課後に教室に連れて行く」

一方的に取り付けられたその日時を澄はすぐに受け入れた。紗依李が会うというか解らないが、それでも、彼女なら、凍りついている紗依李の心を溶かしてくれるかもしれない。そんな気がした。

ガッ

鋭い痛みが後頭部に走った。目の前で澄が目を丸く見開いて源の背後を眺めている。

源はあまりの痛みに軽く呻いた。今までのチヨークなどでは無い。厚い辞書が源に向かって投げられた。普通なら体罰で訴えられるべき事なのに、投げた張本人である杏里もクラスメイトも誰一人気にしてはいない。

「笹原君。大丈夫？保健室行つたほうが……」

「あなたたちは、授業を聞く気が無いわけ？」

冷たい声が澄の言葉を遮る。澄は軽く溜息を吐き、彼女に目を向けた。その表情からは彼女が何を考えているのかわからない事が出来ない。

「笹原君が怪我をしたので保健室に連れて行きたいのですが」

「駄目よ。授業が終わってからにしないさい。……自業自得でしょう？」

それでも何かを言い募ろうとする澄の腕を源がつかんでとめた。

「俺は大丈夫だから」

源を暫く眺めていた澄は漸く、頷いて席に腰を下ろした。

流れる血をぬぐった源は、ほっと安堵の溜息をついた。

2：天使の女の子？

「源！？どうしたのそれ！？」

源が部屋に入ってくるなり紗依李はギョツと目を見開いた。源の頭に巻いてある真っ白な包帯がひどく目立っている。今まで怪我はしてきたが頭というのは初めてだった。

「ああ、大した事じゃないよ。ただ、野々宮に辞書をぶつけられただけ」

何でも無い事のように言った源を紗依李は呆然と眺めた。ぶつけられただけ・・・たえそうであつたとしても、それが“辞書”であるのは問題だ。しかも頭になど、下手したら大怪我しかねない。

「だけって・・・。痛いでしょう？病院行つたほうが・・・」

「平気だよ。一応手当してもらつたし」

「・・・手当して（・・・）もらつた（・・・）？」

その言葉はまるで未知の言葉のように紗依李の耳に響いた。あの場所に源が怪我した事を気にして、その上手当てをしようなどという奇特な人間がいるとは思えない。黒い靄に覆われていない人間も確かにいる。だが、学年が違うから源とかかわりなど無いし、教室での事など知りようもない。

「ああ、今日転入生が来たんだよ。そいつにな」

時期外れの転入生に興味を覚えると同時に同情した。何もこんな学校に来なくてもいいのに。知らなかったのだとしてもあまりに不憫だった。そして、その転入生もまた彼らのようにおかしくなってしまうのだろうか。

「転入生・・・。可愛いそうだね。何もこんな所に来なくてもいいのに」

「そうだな。でも変わった奴だよ。周り無視で俺に話しかけて来るし。・・・それに、なんとなくお前に似ている気がするんだ。・・・どっちかって言うとき昔のお前に」

紗依李の顔から一瞬表情が消えた。じつと源を見つめる。昔は紗依李や源にとつては触れられないもの。それが暗黙の了解となつているはずだった。紗依李にとつてもあまりいい思い出とはいえない。

「昔の・・・？」

「ああ。・・・お前、そいつに会ってみない？」

「え？」

「お前とそいつ、相性がいいような気がする」

源が紗依李と誰かを会わせようとしたのは初めてだった。

源は決して冗談を言っている風ではない。この世界で今、唯一信用できる源の言葉を信じてみることにした。その結果がどうであつたとしても、源と紗依李の止まった時が動き出してくれるようなそんな気がした。何故、そう思ったのかは解らないが。

「わかった」

「じゃあ、明日の放課後に教室でな」

「明日!？」

あまりに急だった。既に約束を取り付けてあったのだろう。こんな強引な源は初めてだった。

「・・・ところで名前は？」

「愛染澄。会えばすぐにわかる」

紗依李は源のその言葉を不思議そうに聞きながら、頷いた。

「やば・・・遅くなっちゃった・・・」

紗依李はオレンジ色に染まりつつある空を窓越しに眺めた。もう30分も経たずに空は黒へと色を変えてしまうだろう。もうすぐ、下校時間が来てしまう。それが過ぎてしまえば、学校にとどまる事など出来なくなる。

源は放課後、と入っていたが下校の後には言っていない。普通“放課後”といえばSHR終了後であって、下校時間終了後ではな

い。紗依李は約束どおり教室にいくつもりだった。それが出来なかったのはいつもの行事のおかげだ。今日は・・・いつもより若干人数が多かった気もするが。

立ち上がろうと体に力を入れた紗依李の顔が一瞬凍りついた。激しい痛みに襲われ、歯を食いしばる。倒れるのも涙をこぼすのも、誰かに助けを求めるのもごめんだった。

壁に捕まる事で何とか立ち上がり、足を踏み出す。

痛む体を引きずるようにして教室にやってきた紗依李は軽い深呼吸とともに扉を開き・・・その場に固まった。

中にいたのは1人の少女だった。青葉学園の制服に身を包んでいたが、ひどく目立つ存在だった。それは、決して教室の中に人が彼女しかいないからでも、彼女の髪の毛が淡い銀色に光っていたからでもない。彼女のかもし出す雰囲気、空気が澄んでいて、この学校の中に感じる強いよども、すべて吹き飛ばしてしまいそうなほどの強く綺麗な白だった。

「あなたは・・・誰・・・？天使・・・？」

紗依李の言葉に中にいた少女が軽く目を見開く。まさかそうくるとは思っていなかったらしく彼女はポカンと紗依李を見つめる。その腕の中にいた黒い猫が小さな泣き声を落とす窓の外に消えていく。

ここが3階なもの、その窓の下にベランダが無いという事実も気にならなかった。

いつの間にか生暖かい水が頬を伝った。それを皮切りに紗依李は

ポロポロと涙をこぼし、しゃくり上げながらその場に座り込んでしまった。

3：墮天使？

「澄。そろそろ学校に遅れる」

高い位置から聞こえた声に、澄は小さく頷いた。水に濡れた髪の毛に光が反射してキラキラと光っている。

無言でタオルで髪の毛を拭いていた澄の真横に真つ黒い猫が降り立つ。その猫は鼻の辺りにしわをよせ、人ならば呆れたような表情とも取れる表情を浮かべて、澄を見上げた。

「また、水浴びかよ……。シャワー浴びればいいのに」

呆れたような言葉は黒猫から聞こえたが、澄はその事実には一切関心を示さない。この黒猫のオーディが人の言葉を話すのは当たり前前の事だった。どうなっているのかは知らないが、とにかく出会った頃から彼は巧みに人の言葉を操る。

「シャワーは高いから。池ならただでしょう？」

澄の肌は冷たい水の中にいたせいか、赤くなっていて、どこか痛々しい様子をかもし出している。

「あつそ。で？そろそろ行かないとまずいだろっ？」

「風に送ってもらってから平気」

澄は身支度を整えながら答える。澄が軽く指を鳴らすと生暖かい風が澄の体を包み込み、ぐっしりと濡れていた髪の毛の水分が一

切無くなった。

「見られないように気をつけろよ」

「解っているよ」

小さく笑みを浮かべた澄に置いて行かれないように、オーディは慌てて澄の肩に飛び乗る。

オーディが飛び乗ると、澄とオーディがその場から姿を消すのはほぼ同時だった。あと、その場に残されたのは何も話さぬ木々のみである。

ぼんやりとかすんでいるようにさえ見える学校と生徒たちに澄は思わず顔を顰めた。あまりの様子に目をしばたたく。この街全体があまりいい雰囲気を持っていないが、それにしてもこの学校はひどすぎる。もう学校中が飲まれているような気がする。

この様子にさすがのオーディも肩の上で体を強張らせた。澄は大きく深呼吸をして学校に足を踏み入れる。心情としては敵地に足を踏み入れる武将のような感じだ。

澄はしばし考え、パチンと指を鳴らす。体の周りに目には見えないう綺麗な空気が渦巻くのを感じてから、案内図を頼りに職員室を探

す。

ここ、青葉学園の職員室は5階にあった。エレベーターが無いため階段を上がりきったところには軽く息を乱していた。

「はあはあ……。すみません、今日から転入してきた愛染澄といます」

職員室で一声かけると、無数の好奇の視線が澄を指した。その視線には好意的な様子は一切無い。

「私が担任の野々宮杏里」

杏里の周りにはかなり濃い色があふれている。全体的に見てもすごいが、一人ずつはよけいにすごい。この学校の中でもしもひずみに飲まれていない人間がいるとすればそれは軌跡以外の何者でもない。

杏里が、澄を一瞥すると、それ以上何も言わずに職員室を出て行ったので、澄も慌ててそれを追いかけた。

杏里の様子を……。澄の銀色の髪の毛にも、肩に乗っている黒猫にも気がついたようすのない。

「もう……。手遅れなのかな？」

小さな声は杏里には聞こえず、真横の相棒はニヤーと一度声高に鳴いただけだった。それでも、もう手遅れなのではないかという思いが澄の頭を支配していく。

「あなた、いつまでそこに突っ立っているつもり？早く席に着きなさい」

教室に入るなりいきなり言われた言葉に澄は一瞬戸惑ったように杏里を見た。紹介も、座る場所の説明も何もなしに、この空気の中に転入生を放り出すなど本来ありえない。それをやる彼女に文句を言ってしまうような気がするが、それが無駄な事を澄はよく知っている。それに、あまり係わり合いにならない方がやりやすい。

生徒のほうへ目を転じた澄は思わず叫び声を上げそうになった。黒いものに包まれた生徒の中に、正常な気を発している男がいた。この空気の中で正気を保てる人間を澄は始めてみた。

「ここ、いい？」

その少年の周りには四方八方すべての机が開いている。その理由は簡単に思い至る。その状況に一瞬吐き気を覚えた。

澄の声に反応をした少年は驚いたように澄の髪の毛を見つめた彼は、やがてコクリと頷いた。

「・・・転入生だよな」

「そう。自己紹介できなかったけど、愛染澄。よろしく」

「笹原源。よろしくな。・・・ここはこういうところだから、まと

もな扱いは諦めた方が……」

カッンという音と共に源の机でチョークがはじけた。杏里が物凄い形相で睨みつけてきていた。

「授業を受ける気が無いのなら、出て行きなさい」

「……どうもすみません」

澄はすぐに返事をしたが、その声が硬くなってしまうのは仕方が無いだろう。この闇に簡単に負け、それ以外の人間を迫害する権利などありえないのに。

「愛染、俺の従妹に会ってくれない？」

「え？」

突然、源に言われた言葉に澄は驚いたが、彼の真剣な表情をなぐめ、軽く頷いた。

「わかった。……明日、放課後に教室に連れて行く」

一方的に取り付けられたその日時を澄はすぐに受け入れた。真剣な顔、そんな彼を見ると、何か重要な事実を知っているのではないかという、気がする。

ガッ

鋭い音と共に目の前の源が倒れこんだ。痛みで呻いている源と辞書を投げたであろう杏里を交互に眺める。

「笹原君。大丈夫？保健室行ったほうが・・・」

「あなたたちは、授業を聞く気が無いわけ？」

冷たい声が澄の言葉を遮る。澄は軽く溜息を吐き、彼女に目を向けた。その表情からは彼女が何を考えているのかわからない事が出ない。

「笹原君が怪我をしたので保健室に連れて行きたいのですが」

「駄目よ。授業が終わってからにしないさ。・・・自業自得でしょう？」

普通は授業中に辞書など飛んでこないのだから、自業自得とはいえないような気がする。腰が浮いた澄の体を源が押し留める。

「俺は大丈夫だから」

源を暫く眺めていた澄は漸く、頷いて席に腰を下ろした。大丈夫だとは思えないが、本人がいいという以上はどうしようもない。

4：墮天使？

「澄、どうしたんだ？お前、おかしいぞ」

オーデイの言葉を受け、澄は手を浸していた泉から視線をオーデイに転じた。その目には戸惑いの色が浮かんでいる。

「オーデイ？何かわかった？」

今日一日別行動をしていたオーデイに一応尋ねてみる。恐らくは無駄だろうが。

オーデイは昔からチヨクチヨク姿を消す。その間何をしているのか解らない。尋ねたところで答えてはくれないだろう。

「いいや」

オーデイの声には何の色も、感情も見えない。せめて彼が人間であればその表情から何かを推し量る事が出来るだろうが、猫の表情を読む事は何年たっても出来そうにない。

「で？何があつたんだよ」

そのくせ、オーデイに澄の感情や思いはつつぬけで、隠し事など出来ない。不公平なその関係が唯一澄に許されたものなのだから仕方が無いのかもしれない。

「正気な人間がいた」

「は？」

オーディがギクリと体を強張らせた。驚きの目で澄を見上げる。その瞳は唯一オーディの多少の感情を澄に伝えてくれるものだった。

「たった一人正気を保っている人間だ」

「お前、そいつ調べろ」

「？」

「今のこの状況がゆがみのせいだけでは無い事はわかるだろう？どう考えても何か別の要因があるはずだ。1人狂っていないというならそれはおかしい。その人間が何か知っている可能性はある」

源が今の状況を作った人間だとは澄には思えない。彼の空気は正気というよりは、とても綺麗で、ひずみのゆがみを増大させようとしている人間にはどうしても思えない。ただ、彼が普通の人間とは思えないのもまた事実だ。

じつと、考え込んでしまった澄を残したまま、オーディが姿を消した。

「明日・・・か・・・」

明日会うことになっている源のいそこ。そのいここに会うことで何かがわかる、そんな予感がした。

「オーデイ、落ち着きなよ」

足元でうろろとしてゐるオーデイに澄は呆れたような眼差しを返した。正気な人間の従姉と会うという話をした時はまさか、オーデイがついてくるとは思っていなかったため、かなり驚いた。

約束の時間をとつの昔に過ぎているのに今だ誰も来る気配が無いことにオーデイが酷くいらだっているのがわかった。彼は人を待たせる事はあっても、待たされる事を酷く嫌う。

「遅い。本当に来るんだな」

「そう言っていたのだから来るでしょう」

外の景色は夕焼けに変わりつつある。そろそろ下校時間を過ぎてしまうかもしれない。

カッンという音とともに1人の少女が入ってきた。体中傷だらけで、それを見ただけで遅れてきた理由が簡単にわかった。だが、その中にもあっても彼女の空気が澄んでいて、源と同じ感じがした。ただ、源よりも強い力を感じる。源の正気はもしかしたら彼女に引つ張られただけなのかもしれない。

「あなたは・・・誰？天使？」

澄は驚いたように目を見張った。今だかつて悪魔や化け物に例えられた事があっても天使に例えられた事は無い。

だが、それよりも驚いたのは少女の瞳から涙が溢れてきたことだ。まるで何かを洗い流すように少女の涙が溢れてきて、床にはじけた。この教室の空気が正常なものに変わっていくような錯覚を感じた。

澄はただ、少女を眺めていた。

真っ青な空間に1人の男がいた。目を瞑り何かを考え込んでいた男は不意に目を開けた。

「アテーナー」

男は何も無い空間に向かって声を掛ける。何の音も無く1人の女が姿を現した。この場所では動く事に意味は無い。皆が同じ場所にいるというのに誰もその他の存在を認識しない。名を呼ばれたときのみ他者と交える事がある場所。それが、この空間であった。

「ゼウス。お呼びで？」

女は意思の強い瞳でゼウスを見る。にらみつけているようにも見えるその様子をゼウスは咎める事をしなかった。

ゼウスが手を振るとその場所に丸い、鏡のようなものが現れた。ただ、それは水の塊であるかのようにゆらゆらと表面が揺らいでいる。彼らが“水鏡”と呼ぶものだ。その水鏡に1人の少女が映し出される。

「賀茂紗依李。この女を調べろ」

アテーナーは女の容貌を頭に留めながら、ゼウスに問いかけるような視線を投げかける。だが、ゼウスがそれに答えてくれない事もわかっていた。彼は決して他者に考えを明かす事はしない。

「地上に降りる」

アテーナーの言葉にゼウスは軽く頷いた。それ以上の言葉を発する事はせず、アテーナーが姿を消すのを目の端に捕らえると、再び瞳を閉じた。

5：白い猫？

「あなたが、笹原君のいところ？」

澄は涙は止まったがいまだに濡れた目をしている少女に問いかけながら、名前を聞いていなかったことに気がついた。なんと呼べばよいのか解らず困惑する。

「……賀茂紗依李です」

「なんで、天使だなんて思ったの？」

澄の問に紗依李が困ったように顔を顰めた。何かを考え込むかのように目を瞬いている。

「……あなたの空気がとても綺麗だったから」

紗依李の言葉に澄は軽く眉をひそめた。澄の予想通り何かしらの力があるのは紗依李のほうだったらしい。澄自身は自分を取り巻く空気を見たことが無いから なんともしえないが少なくともこの学校のよどんだ空気を見ている紗依李の目にはそう映ったのだろう。

「私は天使なんかじゃない。……しいて言うならば駄天使。悪魔でもいいけれど」

「そんなことない!？」

きっぱりと言い切った紗依李に澄は少しだけ笑みを見せる。

「あなたの目には何が映るの？」

「……黒い空気。皆を押しつぶしている。それに纏われない人間はほとんどいない」

「ほとんど？」

という事は少しはいるという事なのだろうか。その負けていない人物にも興味があるし、もし紗依李の目にそれらを完全に見抜くだけの力があるのならば、最も黒い人……ひずみに近い人間のことも解るかもしれない。

「うん。私を含めて4人かな。黒くないの」

「1人は笹原君でしょうか？残りの2人は？」

「2年生と3年生の姉妹……。何で源……」

「私にもそういう力あるから。……私はこの学校を元に戻してきたの。協力してくれない？」

目をまん丸に見開いた紗依李は次の瞬間本当に嬉しそうに笑った。

「何をすればいいの？」

「まず、その2人を紹介して。あと、最も黒いものを背負っている人間、わかる？」

コックリと頷いた紗依李からはさっきまでの弱々しい雰囲気が完全に消えていた。

「3年生の水原香織・・・ね。何故そう思うの？」

「うん・・・なんていうのかな・・・他の人は黒い空気がまとわりついているっていうかんじだけど、あの人はまるで、噴出している・・・とかそういう風に見えたから」

紗依李の言葉に澄が軽く目をしばたたく。

澄は香織を知らないが、他の人間には黒いものがまとわりついているという風に見えるのは事実だ。それだけを考えれば紗依李の言っていることには信憑性があるが澄のようにそうあるべくして存在しているわけではない紗依李にそこまで感じる事が出来るというのが信じられない。

「あなた・・・いったい・・・」

澄の口から零れ落ちた疑問は側で上がったニャーという泣き声にかき消された。

「え？」

澄と紗依李が同時に足元を見ると、真っ白な猫が紗依李の足元に擦り寄っていた。首輪をしていないことからも野良猫のように見える。

「かわいー！？」

目がハートになりそうなほどの笑顔でしゃがみ込んで白猫を抱えた紗依李に猫は甘えるように擦り寄った。その様子をはじめて会った頃のオーデイと重なって、澄は思わず一步後ろに下がった。

「澄？猫苦手なの？・・・猫飼っているのに」

信じられないというように言葉にした紗依李は猫の顔を覗き込んで笑い声を上げた。

「紗依李・・・？どうしたの？」

「見て、澄。この子額に月のようなアザがある。決めた。“ルナ”にする。よろしくね、ルナ」

「か・・・飼うの・・・。」

今の紗依李の様子から、これ以上何を言っても無駄な事はわかってきっていたが、澄は恐る恐る尋ねた。何かとてつもなく嫌な予感がある。今その猫を拾う事が澄にとっても紗依李にとってもいいことにならないのでは無いかという気さえする。

「もちろん」

本当に綺麗な、キラキラしたその笑顔に澄は頬を引きつらせた。

6：白い猫？

ミャー

突然耳元に響いた声に澄は小さく息を呑んだ。近くの生け垣の中から真つ黒な猫が顔を出している。甘えるように泣く猫を、恐る恐る抱き上げた。猫は澄の腕の中でゴロゴロと喉を鳴らしている。

「君・・・どこの子？」

見た感じだと首輪をしていないから野良猫かもしれないが、それにしては随分と小奇麗にしている。

猫の瞳が澄の銀色の髪の毛の色と同じ色に見えた。その瞳が悲しげに揺らめいたのを見たとき、澄は彼を家につれて帰ることを決めた。

「おい、何してんだ？」

突然腹の上に衝撃がきて、澄は軽く息を呑んだ。目を開くと、銀色の瞳が澄を見下ろしている。

「重い」

「さっきからずっと呼んでるのに無視するからだろうが。何考えて

た？」

「・・・アンタと初めてあったときのこと。あの時はまさか喋ると思わなかったから初めて言葉を聞いた時はかなり驚いた。」

「何だよ突然」

ピョンと澄の腹から飛び降りたオーデイはジッと澄を見下ろした。小さな猫の姿で、簡単に踏み潰せてしまえるはずなのに、何故か澄は彼に敵うと思った事は無い。

「・・・今日白い猫を紗依李が拾った。何かすごく嫌な予感がする、強い力も持っているし・・・。早く解決しないと」

「目処はたつたのか？」

「紗依李が首謀者っぽい人に気がついたらしいから、明日教えてもらう。それでひずみを封じて解決」

「駄目だ」

「え？」

澄は突然の否定の言葉に驚いて慌てて立ち上がった。すぐそばにいる黒猫を見下ろす。

「駄目だ。暫くは何もするな、ひずみも、ゆがみも放っておけ」

「な・・・」

ありえない言葉に澄は目を見開く。今まで側にいてもただの一度も澄のやり方に反発した事が無かったオーディの初めての反論が否定、それも仕事自体を否定するものだった事に驚きが隠せない。

「何を言っているか・・・わかってるの・・・？放っておけば・・・」

突然体に強い圧力が襲い掛かり、澄はその場に倒れこんだ。あまりの苦しさに呼吸すらまともに出来ず、力を使うことすらも出来なかった。ただ、こちらを無機質に見ているオーディにぼんやりとした視線を送ることしか出来ない。

「世界を壊す事はしない。今後のためだ。お前の反論は許さない。もし、俺に意に反すればお前の体を痛みが襲う」

「!?!」

突然体中のすべての空気が抜けるような痛みが走った。鋭い痛みと息をする事さえできない苦しさに、喘ぐ。だが、言葉一つ出てはこなかった。

漸く体の痛みがなくなったとき、澄の体にはもはや何の感覚も残ってはいなかった。それからゆっくに1時間はその場から動く事さえも、出来ずにただ、オーディとの会話を思い出していた。

彼が何故あんなことを言ったのかは解らないが、彼の言葉に嘘が無いことは解る。

もし澄が彼の言葉を見れば、一体どんな目にあわされるのか、解ったものではない。

「お前、これ、どうしたんだ？」

夕食の席で自分の隣にちょこんと座っている白い猫を見た源があらんぐりと口を開いた。悠然と座っている猫と、その猫をまるで家族のように扱う紗依李を交互に眺める。

「今日拾ったの」

「野良？綺麗な猫だけど飼い猫じゃないのか？」

「首輪をしていなかったもの。それに・・・この子は私に神様がくれたプレゼントかもしれないし」

源が目を見開く。紗依李の言いたい事も言っていることも解る。彼女の思いを理解できるだけに、その想いの、願いの深さに何も言う事が出来なくなってしまうた。

「そう・・・か・・・。ならいいんだ・・・紗依李を頼むな」

源が軽く頭をなでると、その猫はニャーと軽く泣いた。尻尾を振っている様子に源が安心したようにほっと息を着いた。この猫が飼いたい猫で無いことを願う。紗依李の側からいなくなることを。

猫はまるでその言葉が聞こえたように、再び鳴いた。

「紗依李、名前決めたのか？」

「ルナ。ほら、ここに三日月形のアザがあるでしょう？」

確かにルナの額には三日月型のアザができている。まるで月の輪熊のようなそれに源はルナがクマに変身するさまを思い描き、苦笑した。あるはずが無い、これはただの猫だ。猫が紗依李を傷つけるはずがない。

7：諸悪の根源？

「行つてきます」

青葉学園の2年生になる来須明菜とその姉で3年生になる来須まもりが声をそろえて家の中に声を掛ける。シンと静まり返った重々しい空気のみが答えのように返つて来た。

2人は同時に溜息を吐くと、小さく頷いた。母が部屋に閉じこもつて出てこなくなったのは2ヶ月ほど前の事だ。突然人が狂ったように暴れたかと思うと、それ以降全く部屋から出てこない。食事を持つて行つても扉越しに声を掛けても、決して2人の子供の言葉に返事を返してくれる事はなかった。

部活をやっている明菜に付き合つてまもりも毎日早く来ている。屋上へ行くという姉と別れた明菜は震える手を握り締め、音楽室の戸を開いた。未だ誰も来ていないことを見ると、ほっと息をつく。

「・・・あ、明菜先輩!？」

明菜に遅れること数分。やつて来た人物を見た明菜は安心したような表情を浮かべた。

「加茂さん・・・・・・・・。」

だがその表情もすぐに凍りつく。加茂紗依李は1人ではなかった。たまに一緒にここへ来る従弟の源でもない。明菜の見知らぬ女生徒を連れていた。凍りついた明菜の表情に気がついたのか紗依李が小さく笑みを浮かべる。

「先輩、転入生の愛染澄さん。澄は大丈夫ですよ。それより、そろそろ始めませんか？」

「そうね。」

明菜は促されるようにしてピアノの前に座った。そのすぐ脇に紗依李が立つ。明菜がつむぎだす音にあわせて紗依李が歌う。紗依李の綺麗な、澄んだ声を聞くと心が温かくなるような、洗われるような不思議な感覚に陥る。そんな感覚を屋上に居る姉にも味わって欲しくて明菜は窓を開けている。

元々明菜と紗依李はよく部活の前にこうして歌を合わせていた。ただ、部活をしていない紗依李の時間は30分ほどしかなかった。・が、2月ほど前から部活に来る人間が減り、今では1人も居ない。明菜くらいのものだ。だからこそ、明菜にとって部活のこの時間が最も心穏やかに居られる大切な時なのだ。

明菜と紗依李がつむぐ音を聞いた澄は驚くと同時に嫌な予感に囚われた。紗依李の声は人を癒す力がある。淡く、綺麗な光が紗依李を中心にあふれ出てこの音楽室の空気を綺麗に癒していく。

明菜とその姉のまもり、そして源が狂わずに居られる理由がわかった気がした。もし、澄にこの力があれば……。

思わず考えた言葉を澄は慌てて否定した。理想的な力ではあるがそれを澄は持たないし、持っている紗依李を引きずり込むわけにはいかない。

澄は歌っている紗依李と明菜を置いて音楽室から外に出た。そしてその扉のすぐそばに見覚えのある黒い猫と白い猫が居る事に気がついた。

「・・・オーデイ、ルナはあなたの仲間？」

その間にオーデイは答えない。ぷいっと背を向けると澄の前から走り去った。澄はルナの脇に屈みこむとその背を優しくなでる。

「仲間・・・なんでしょうね・・・お願いよ、紗依李を巻き込まないで。あの子は私のような生活は無理」

「・・・それを決めるのは私ではありません」

「!？」

俯いた耳に響いた女性の声に澄はジッとルナを見つめた。確かにルナが話している。

「巻き込まない方法は？」

「私が知りうることはありません。私はただあの方の命令通りに動くのみです」

トンツとジャンプした白い猫はすぐにその姿を消した。

「!？」

オーディが目の前で突然消えるなどという経験は無い。ルナのほうが力が強いのか・・・いや、恐らくオーディは何かを隠している。

澄はこれから先、起こりうる最悪の事態を想定して深く溜息をついた。自分のような人間はこれ以上出て欲しくない。

8：諸悪の根源？

澄は紗依李に聞かされていた姉のまもりが居るといいう屋上へと足を向けた。窓を開いていたから恐らく屋上に居てもあの声は聞こえるはずだ。そうであれば屋上から移動しているということはないだろう。

彼女を見つけてどうするかは今の澄にはわからない。オーデイにきつく言われている以上今回の騒動を完全に終わらせる事は出来ない。言いつけを破ればオーデイがどんな手を使うか判ったものではない。今よりももっと危ない目に合うことだって考えられる。

屋上の扉に手をかけた澄は顔を顰めた。屋上の方から物凄く強い気配を感じる。意を決して入った澄の目に映ったのは2人の女生徒。ネクタイの色からどちらも3年生であることが窺える。そのうちの1人は明菜に似ていたが、明菜のような綺麗な気配ではなく、気配が白と黒に揺らいでいるような印象を受けた。恐らく明菜の姉のまもりだろう。だが、強烈なのはもう1人だ。まもりと向かい合って立っている彼女からは強烈な強く黒いものが吹き出している。その気配にあてられる形でまもりの気配がゆらゆらとゆれていた。彼女が紗依李が言っていた「水原香織」なのだろう。

澄が顔を強張らせたまま一步屋上へ足を踏み入れるとさっきまでかすかにしか聞こえていなかった紗依李の歌声が響き渡った。まもりを守るように強い光が下から発せられてくる。まもりの光は綺麗な白に変わっていた。だが、香織の光は変わらず真っ黒だ。まるで撒き散らしているようなそれに澄の体が小刻みに震えた。彼女は今まで澄が対峙したどれとも似つかない、恐ろしいものに見えた。

「……最悪。邪魔者がもう1人増えたのね」

香織の声は表情や気配と似ても似つかぬほど澄んだ響を持っていた。

香織が一步こちらに歩を進めるごとに澄にかかる圧力が増えてくる。この程度で済んでいるのは紗依李の歌のおかげかもしれない。

「そこで見ているといいわ」

ニツコリと笑った香織はクルリと方向転換をし、まもりに手をかけた。

「!？」

澄が慌ててそちらに駆け寄ったが、彼女がフェンスに到達するよりも前にまもりの体は宙に浮いていた。くすくすと笑みを漏らして香織が屋上を出て行くのを背後で感じながら、澄は意識を集中する。

《風、お願い彼女を助けて!？》

怒鳴りつけるように言うと、強い風が一度吹き、まもりの体を屋上へと戻した。ぐったりと意識を失っているが怪我をしている様子のないまもりにほっと息をついた澄はその場にへたり込んだ。ふつふつと怒りが湧いてくる。

「オーデイ、答えて!？まだ、何もしてはいけないというの!？早くひずみを見つけないければ……」

「まだ、駄目だ。ひずみを封じる事は許さない」

風の中に響いた声に、澄は唇をかみ締めて俯いた。何故この声に逆らう事すらも出来ないのかわからないが、オーディの言いつけを破った事は過去一度も無い。そして、これからそんな日は来ないだろう。

9：闇の力

源は気がつくと思覚えのある場所に立っていた。小学校の屋上。体はまるで重力を持たないかのようにフワフワと浮いていて、これが夢なのか現実なのか判断する材料を今の源は持たない。

屋上には数人の子供達が居て、校庭からは歓声や楽しげな笑い声が響いてくる。だが、そこにいる誰もが源の存在に気がついてはいない。

カチャツと扉の開く音がして一人の少女が屋上に顔を出した。そのとたんあたりに響いていた歓声も笑い声も消えた。まるで何も、誰も居ないかのように静まり返っている。だが、そこから人が消えたわけではなく、全員が息をつめてその扉に立つ少女へと目を向けている。

その少女の顔を見た源は掌が汗ばみ、服でぬぐう。それでも、緊張の汗は次から次へと溢れてきた。

そこに立っていたのは紗依李だった。あの頃の紗依李が、あの頃と同じように何の感情も写さないガラス玉の瞳で彼らを見ていた。

これは夢だ。あの時の・・・記憶の彼方に消し去ってしまいたいあの時の夢だ。現実であるはずがない。

「紗依李！？駄目だ！？入っちゃ駄目だ！？帰れ・・・帰れーーー！！？」

源は出せる限りの大声を紗依李に吐き出した。だが、源の声は届

かない。掴もうと伸ばした手も、紗依李にふれる事は出来なかった。

黙っていた一団から1人の少年が前に出てきた。自分が間違っていないと、自分は正しいのだと信じていたあの頃の幼く愚かだった自分が、紗依李に冷たい目を向けている。

「なあ、お前、化け物なんだろう？母さんも叔母さんも言ってるじゃん。……ここから飛べよ。化け物なら大丈夫だろう？」

残酷な言葉をとめたくて、過去の自分に手を伸ばすがやはりふれる事は出来ない。源はそれ以上見ていることも聞いている事も出来ずに目を閉じ、耳を塞いだ。これから何が起こるかわかっている。忘れた事なんてただの一度もない。

「いいよ」

目も耳も塞いでいるのに、映像は源の頭の中に溢れてきて、声が耳の奥から聞こえた。

紗依李が屋上に足を踏み入れると全員が道を開けた。あの時の源は紗依李が化け物とは思っていても、屋上から飛び降りて無事で居るはずが無いこともわかっていた。そして、飛ぶわけが無いと高をくくっていたのだ。飛ぶのをやめた時に罵りの言葉を吐くつもりで待ち構えていた源は、何の感情も写さないその目で源を見たまま、屋上から下へと飛び降りた紗依李に恐怖を感じた。いつもの嫌なものではなく、そしてとても自分勝手な恐怖を。

「俺……人殺しになっちゃったのかな……」

あの時心の中で呟いた声が、今の源に聞こえてきた。まるで攻め

立てるようなその言葉に源はグツと息を呑んだ。

よけいに目と耳を塞ぐと、急速にあたりの音が消えていった。

「ねえ、苦しいでしょう？ 忘れたいでしょう？ ……この手を取りなさいよ。そしたら、全てを忘れさせてあげる」

源の耳に鈴のようにリンと響く女の声が聞こえた。あざ笑うかのように語りかけてくる。目を開けた源は何も無い真っ暗の空間にいた。上も下も何も見えないのに、不思議と自分の体だけは見る事が出来た。

目の前に居る女もまた目に入った。長い髪の毛の彼女に覚えがある。2学年上の先輩、水原香織だ。学校にいる時のような恐ろしい表情ではなく笑みを浮かべている。だが、その笑みは綺麗なものは違い、背筋が凍るような恐ろしさをはらんだものだった。

「……さあ、何も知らなかった。幸せだった時に戻りなさい」

香織はそつと手を差し出すと源の手を握った。まるで氷のようにつめたいその手の力は驚くほど強く、振りほどく事が出来ない。

「さあ、幸せだった時に」

同じ事を繰り返す香織の言葉が源の中に響いた。

幸せでそして、愚かだったあの時の感情が、想いが源の中に溢れてくる。

「あそこから落ちててもまだ生きているなんて・・・」

「何てあつかましいの」

「本当にあの化け物はおぞましい」

母と叔母の言葉が源の耳に入ってくる。娘が死ななかったその事実にショックを受けている叔母や母の姿に吐き気がした。母は自分の子供である源が死に掛けても同じ言葉を投げかけるのだろうか。絶対に言ってはいけない言葉を彼らが口に行っている事は幼い源にもわかった。

だけど、源はそれを咎める事は出来なかった。何も映らないその瞳で源を見据えたまま、足を離れた紗依李の姿が頭から離れない。紗依李にとっては源も、母も叔母も同じ。紗依李の心を殺し、傷つけてきたのは源なのだ。

グツと息を吸い込んだ源は、またあの瞳で見つめられる事を覚悟して扉を開けた。許されないかも知れないけれど、謝って、もう二度としないと誓うつもりだった。

「あなた、だあれ？」

そんな決意を・・・自分勝手な決意を固めた源を待っていたのは予想外の言葉だった。紗依李の目には色がある。人形の様だった紗依李が人の子のように微笑んでいる。紗依李の笑顔を見たのは初めてだった。

「・・・私のお友達なの？」

源の目から涙が溢れてきた。紗依李は辛かったときを、過去を忘れてしまった。それは紗依李にとってはいいことだったのかもしれないが、それでも、源は自分の罪を・・・決して許されない罪を意識した。紗依李は自分自身をこんな目に合わせた張本人を前にして、笑みを浮かべている。

「どうして、泣いているの？誰かにいじめられたの？」

源はよけいに涙をこぼした。

「・・・めん・・・。ごめん・・・紗依李・・・俺、守るよ。もう絶対に酷い事はしない。紗依李を守る」

「？ありがとう」

一瞬きよとした紗依李はまるで太陽のような笑顔で源に笑い

かけた。その時、源は誓った。二度と紗依李を裏切らない。絶対に紗依李を守る。

「俺は……誓ったんだ。紗依李を守るって誓ったんだ!？」

源は響く香織の声を振り払うかのように大声で叫んだ。

その声に反応して、大きく風が流れ……息苦しいほどの闇が遠退いていくのがわかった。

10：光の力？

「愛染さん。ありがとう」

放課後、保健室を訪れた澄は、ベッドの上で弱々しく、でも確かに微笑んでいるまもりに軽く頷いた。ほぼ一日眠り続けていたまもりの顔色は随分とよくなっている。アレだけの負の気にさらされたにしては回復が早い。その精神力の強さがいまだに二人が狂わずにいられる要因のひとつなのかもしれない。

「・・・もう大丈夫だと思うけれど、一応病院で見てもらったほうがいいわ」

「そうする」

弱々しく笑ったまもりはそうするつもりが無いような気がした。いけない理由があるのかも知れないが、それは澄が干渉する事ではない。澄の役目はこの狂った町を元の状態に戻す事だけなのだから。

そう、オーデイのあの言葉さえなければもつと本格的に動く事が出来るものを。無力な自分に吐き気がした。

「あ・・・」

まもりが突然苦しそうに息をし、その場に倒れこんだ。突然の出来事に澄は軽く目をしばたたく。まもりに手を当てると穏やかに息をしている。何かの衝撃で気を失っただけのようだ。

「何が・・・。あれは・・・源と紗依李の家の方・・・？」

まもりの急変の原因を探ろうとあたりを見回した澄はある方角に目を向けた。紗依李や源が住んでいる方角から強い負の気配が感じる。まもりが倒れこんだのはその気配に当てられたのだろう。今朝香織の負の気を大量に浴びた事で敏感になっているのかもしれない。

《風よ、彼女を家に送って》

ふわりとまもりの体が浮き、一瞬の内に姿を消した。それを見届けた澄が保健室から駆け出そうとすると目の前に黒い猫が降り立った。

「行くな」

短い命令に逡巡したが、澄はすぐにオーディをまたいで駆け出した。ひずみを封じるわけではなく、原因を探るだけのつもりだった。

それが判ったのか、それとも他の意図があるのか、オーディはこれ以上澄を止めようとはしなかった。

「ただいま」

紗依李は元気に声を掛けて家の中に入った。だが、中からは何の物音もしない。シンツと静まり返っている。いつもならば、何故か紗依李の家に入り浸っている源が出てくるのにそんな気配は微塵もなかった。

「源？」

呟いた紗依李は、不意に強い何かを感じその場にしゃがみ込んだ。息苦しいほどの黒いものが家中を満たしている事に初めて気がついた。学校では近づけば息苦しく感じるのに、今回はそれが全くなかった。普段と違うという感覚さえも無かったのに、今家を埋め尽くす黒は学校のそれとは似ても似つかぬほどに濃く、心臓が驚？みにされるほどの衝撃を感じた。

這うようにして居間に行った紗依李は、源の体が黒いものに包まれている事に気がつき愕然とした。クラスメイトや先生の周りの黒いものは頭の上に溜まっているという印象があるが、源のそれは、まるで黒い繭のように源を取り巻いている。

「源・・・」

弱々しい声が紗依李から漏れる。

「……めん……。ごめん……。紗依李。……。俺、守るよ。もう絶対に酷い事はしない。紗依李を守る」

泣きながら訴えていた過去の源の言葉が頭に浮かんた。あれ以来源は紗依李にとってなくてはならない存在となっている。紗依李の唯一の味方。その前に何があつたのか知らない紗依李にとって、今の源だけが、唯一無二の存在。

その源が強い力に吞まれようとしているのはわかる。でも、自分に何が出来るとはわからない。紗依李の持つ力について紗依李よりもよほど詳しいであろう澄は今、ここにはいない。

「誰か……。源を……。助けて……。」

「あなたがなんとかしなさい」

ルナがふわりと紗依李の横に降り立つ。その声はルナが発したものだというのは容易に想像できたが、今、それについて詳しく聞いている余裕はない。

「私が……。?」

「そう、よく耳を澄まして、源が必死に抵抗をしているでしょう?」

紗依李は言われたとおりに耳を澄ませた。あの黒い繭の中で何か

が必死に外に出ようとしている、そんな音が聞こえたような気がした。

「源!？」

今度はさっきよりもはつきりとした声で源を呼ぶ。その声に呼応するかように繭の中身が大きく音を立てる。

「願いは力よ」

「げーん!？」

ルナの言葉に従うようにして、強い願いを、いつも通りの源を望んで、強く、強く源の名を呼ぶ。

ふわりと風が走り、源を取り巻いていた繭が一瞬にして掻き消え、家を覆っていた闇は全てが跡形もなく吹き飛んだ。

それと同時に紗依李の体がかしぎ、ぐったりと倒れこんだ。

11：光の力？

澄が紗依李の家に着くのと、強い負の力が消えるのはほぼ同時だった。漂う残り香さえもなく、跡形もなく消え去った。澄の力を持つてしてもここまで完璧に負の力をかき消す事など不可能だ。

「・・・・・・・・な・・・・・・・・」

「ククク・・・・」

愕然とした澄の耳に、押し殺したような笑い声が響く。オーディが笑っている。人ならば肩を震わせて声を押し殺しているように見えるであろう笑い方だ。

「オーディ・・・・・・・・」

澄は生まれて初めて彼が怖いと思った。何百年もずっと、共にあったオーディがはじめて会った人のようにさえ感じる。

「澄、アレにこの町を浄化させろ」

澄が驚いたように目を見張る。彼は今、何と言った？この町を浄化させる。この闇に覆われた町を。いくらなんでも無茶だ。

「無茶よ」

「いいや、できるさ。アレならな。・・・・最もそれだけ大きな力を使えば二度と人として生きる事は叶わぬだろうがな」

「それって……」

言葉を失ったように立ち尽くす澄に追い討ちをかけるようにオーデイが言い募った。

「……お前も仲間が欲しかったんだろ？それに……あの力があればひずみに影響されて消える人はいなくなる」

言っている事はわかる。確かに澄が1人は嫌だと思ったのは一度や二度ではないし、ひずみに巻き込まれたが故に、何もかもを消される人々を見て、嫌な思いをした事も多々ある。もし、ひずみの影響を人に与えずにすむ方法があればいいのにと何度も願った。

だけど、あの“紗依李”が澄と同じ人生を送ることを考えると背筋が凍る。紗依李にそんな生活は無理だし、なによりも源と紗依李を引き離すような真似はしたくなかった。

「嫌よ、無理。紗依李を私と同じにしないで！？あなた達の、神の罪にこれ以上人を巻き込まないでよ！？」

オーデイは何も言わない。ただ、澄を見ているだけだ。

暫くの沈黙の後、オーデイが口を開く。

「このままの状態でひずみを消せば、この町は蛻の殻になるぞ。」

澄は絶望したように呆然と立ち尽くす。今回は犠牲者が余りに多すぎる。でも、それでも紗依李には自分と同じ道を歩んで欲しくは無い。紗依李には限られた命を、大切な人と共に生きる道を選んでもらいたい。

「方法があるはずだわ……。だから……。お願い。もう少し……。待って……」

澄の決死の願いをオーデイは鼻で笑う。

「……ならば、探してみろ」

クルリと体の向きを変えたオーデイはふと、何かに気がついたように澄のほうをふりむいた。

「それに、あの娘は、無関係ではない」

「え……」

澄に反論の間も与えず、今度こそ完全に姿を消した。

「……どういうこと……」

澄の疑問は、誰に聞かれることもなく、風に乗って消えた。

鋭い衝撃を体を感じ、香織は目を開いた。黒い色に包まれた空気が心地よく感じる。その中になれば今の衝撃はすぐに無かったものができるかも知れない。

「あの・・・女・・・」

香織の口から鋭い声が漏れる。香織がはく息も黒くにこっていた。

ゆつくりと歩を進めた香織は鏡の前に立つ。鏡は何故か全面が黒に覆われていて、そこから不思議な空気が流れている。香織はその黒い物に手をかざす。ぐったりと疲れた倦怠感が消えていく。

「ゆるさない・・・」

自分と同じように力を持ち、人に嫌われて生きてきた紗依李が、今、自分とは違う人の中心にいる生活を送っている。許せない。あの女のすべて壊してやる。

心に浮かんだ想いを香織はグツとかみ締めた。香織の体から立ち上る黒い光が、さらに、濃く、恐ろしく変化していく。

「許さない」

香織は口元に笑みを浮かべ、壮絶な笑いを顔に浮かべた。この空気さえも今の香織には心地がよかった。

12：神の領域？

「ん・・・」

ふらふらとする頭を振りつつ起き上がった紗依李は部屋のベッドで寝ていた。ここまで来た記憶が無い。何とか思い出そうと寝ぼけた頭を何回も振る。徐々に記憶が蘇ってきた。

「ルナ！？」

部屋に響く大きな声で呼ぶと、白い猫が部屋の入り口から入ってきて紗依李のすぐ隣に腰を下ろした。毛づくろいをしている様は猫そのものだが、この猫が昨日言葉を発したのは夢ではないはずだ。

「あなた、何なの？」

紗依李の目が据わり、いらだたしげに舌打ちをした。その様にルナが小首をかしげる。

「ねえ、教えてよ。あなたは・・・私達の敵なの？」

その問にも猫が声を発する事は無かった。

「お願い・・・教えてよ・・・」

紗依李が懇願するようにルナにすがった。目には涙さえ浮かんでいる。そのいつに無く弱々しい紗依李の様子にルナが驚いたように目を見開いた。紗依李がこんなに弱い様子を見せた事はいまだかつて無いことだ。

「ねえ・・・私は・・・本当に人間？」

今にも泣きそうな弱々しい声にルナの眉が跳ね上がる。・・・と
その時、窓の外から紗依李を呼ぶ声が聞こえた。

「紗依李！？起きてるか？」

源の声に紗依李の肩がビクリと震えた。顔には恐怖が張り付いている。ルナは、まじまじと紗依李の顔を覗き込んだ。紗依李が源を恐れるなど絶対にあるはずが無い・・・にもかかわらず、紗依李の目には深い恐怖が浮かんでいて、彼女は確実に源を恐れている。

「紗依李。あなた・・・どうしたの？」

ルナの口から人の言葉が漏れる。さっきまで聞いたかった声が聞こえたのに、今は紗依李の耳にはその声は届いていないようだ。

「紗依・・・」

「よお、まだ寝てるのか？」

ルナが口を開くよりも早く、窓が開いて源が部屋の中に入ってきた。

一度震えた紗依李はキツクルナを抱きしめると、小さく深呼吸をしてから、源のほうへ目を向けた。

「お早う、源。ごめん、今用意するね」

そう言った紗依李はいつもと変わらないように見え、ルナはよけいに訝しく思った。

「紗依李、笠原君。おは……」

目の前を歩く紗依李と源に声をかけた澄はその場に凍りついた。紗依李に違和感がある。はつきりとしたものではなく、でも、何かいつもと違うような気がする。

澄の目の端で、黒猫と白猫が並んで道の端へと消えていくのが映ったが、今の澄の関心はそちらには無い。

「澄。お早う。どうかした？」

ふりむいた紗依李はまん丸に目を見開いて紗依李の顔を凝視している澄をキョトンと眺めた。その様子も、態度も何もいつもと変わらない。だが、たった一つ、瞳の中にある輝きがいつもと違う気がした。そして、紗依李を取り巻く清浄な空気が跡形もなく消えている。闇が見えるわけでは無いが、それでも、今の紗依李は異常だ。

「紗依李。ちよつといい？……笠原君、悪いんだけど、先行つてて」

有無を言わせぬ強い口調で言うと、一瞬反論のようなものを顔に

浮かべたが、それでも小さく頷いて先に学校へ向かった。

「澄？どうかしたの？」

「何か、あった？」

目立たぬようにゆっくりと歩きながら端的に訊ねると紗依李は弱々しく笑った。それは、“普通”とはかけ離れていて、さっきまで相当無理をしていた事が窺える。

「何で……わかったの？源も気づかなかったのに……」

「いつもと雰囲気が違う、普通の人には分らないと思うけど……それで？」

「わからない」

眉を顰め、もう一度問いただそうとした澄は、紗依李の表情を見て押し黙った。本当に紗依李はわからないのだ。正確に言つとどう説明すればいいのか分からないという感じだろう。

「……わからないの。ただ、すごく怖い」

「え？」

「源が……怖い。こんな事初めて」

ありえない言葉に澄は目をまん丸に見開いて紗依李を見た。澄の目から見ても2人の間には強い絆があつて、信頼があつて。その間に他人が入る余地さえも無いように見えていた。それなのに、源が

怖い・・・と。理由もなくただ、おびえている紗依李に言うべき言葉は澄は持たなかった。

「あら、こんな所で何をしているの？サボリ？」

1時間目の授業をサボって屋上に座っていた紗依李はころころと笑うように響く声音に、瞑っていた目を開いた。目の前にほのかな笑みを浮かべて香織が立っている。驚いたように目を見張った紗依李は、違和感に気がついた。

香織の周りにある黒い空気はいつもの通り、何も変わらない。おかしいのは紗依李の方だ。いつもならその空気に充てられて体調を崩すのに、今の紗依李は彼女の空気が嫌なものだとは思わなかった。どちらかと言えば心地よいとさえ思う。そんな自分にぞっとした。

「いつもと雰囲気が違う、普通の人には分からないと思うけど・・・」

澄が朝言っていた言葉が耳に蘇った。普通の人には分からない変化を澄だけが感じ取る。紗依李の周りにもあの黒いものがあるのかも知れない。そう思うとよけいにぞっとした。

「・・・・・・・・水原・・・・香織先輩・・・・・・・・」

紗依李の声はかすれていた。それが恐怖からなのか、もっと別の感情からなのか推し量る事が出来ない。

「ねえ、あなた、笠原源が怖い？」

目を見開く紗依李を見た香織が顔に笑みを浮かべる。壮絶で、ある意味美しく、そして恐ろしい笑みだった。

「・・・・・・・・な・・・・・・・・に・・・・・・・・」

「あなたが、何であの幼馴染君を怖がるか教えてあげましょうか？」

「何を・・・・・・・・！？何でああなたがそんなこと・・・・・・・・」

「あなたの失われた過去を思い出させてあげるわ」

ニッコリと笑った香織は紗依李の頬に手を当てた。その手があまりに冷たくて、体中に電撃が走ったみたいに動く事が出来なくなつた。

「“思い出して”」

それは日本語のはずなのに、紗依李の耳に不思議な響を持って響

いた。体中を駆け抜けた息も出来ぬほどの痛みに紗依李の顔が驚愕と苦痛に歪む。

まるでテープを巻き戻しているような感じに記憶の中に色々なものが浮かんでは消えた。紗依李の目から色が消える。

“ 楽になりたいでしょう？ ”

まるで耳に直接響くような囁き声に頷いてしまいたい。誰よりも信じていた。でも・・・その真実は全てが嘘だったのだ。もう、誰も信じられない。

「あ・・・」

死んだような空ろな瞳で香織を見つめ、何かを言おうとした紗依李は、不意に意識が何かに引っ張られるような感覚がした。抵抗する事もできず、何か、不思議な力に引きずられるようにして、紗依李は意識を失った。

何も言わずにぐったりと倒れた紗依李を香織は驚いた面持ちで見つめた。あと少しで彼女がこちら側に落ちたのに、何か別のものに邪魔をされた。

「な・・・!？」

バツと紗依李の背後に目をやった香織は苦々しい面持ちで、でも逃げるかのようにその場を去っていく。

紗依李の背後に澄が、佇んでいた。厳しい表情で香織の去った先を見つめ、溜息をつく。

「間一髪・・・か。」

耳を打つ言葉に黒猫と白猫を睨みつける。

「・・・もしこの子が落ちていたら・・・この子を狩らなければならなかったわ。・・・後は向こうへついてから、かしら」

「大丈夫なわけ？とつさに引つ張ってしまったけど、あそこはヒトが長時間居られる場所では無い」

「紗依李なら大丈夫だ。」

言い切る黒猫に澄は小さく頷いた。何を考えているのか分からないやつだが、それでも、オーディはそんなくだらしない嘘だけはつかない。今の奴の言葉は信じられる。

13：神の領域？

目の前に光が明滅し、あたりの色が急激に失われていく。その突然の変化に紗依李は喉元から這い上がるかのような恐怖を何とか押さえ込もうとした。だが、恐怖は足元から、ジワリジワリと迫ってくる。

チカチカと明滅していた光が消えると、紗依李の周りからすべてのものが消えていた。屋上の地面も、壁も、扉も、そして水原香織の姿も見えない。あたりの色は、海よりも澄んだ綺麗な青、まるで空の中に吸い込まれたかのような錯覚をおこさせるような場所だ。

「ここ……は……」

紗依李の声は、響くこともなく虚空へ吸い込まれていった。何でこんな場所に居るのか、理解できない。

「私……は……」

不意に紗依李の中に先ほどの記憶が蘇ってきた。香織によってこじ開けられた記憶の蓋が、再び開かれた。

「……嘘つき……。みんな……」

「そこまでよ」

細く、しなやかな指が紗依李の口を塞ぐ。人が側に居ると思っていなかった紗依李は、文字通り飛び上がるほどに驚いた。背後に立った女性を上目遣いに見つめた。彼女は人を安心させるような柔

らかな笑みを浮かべていて、紗依李は何故か泣き出したような笑いたいような不思議な気分に陥った。

「誰……?」

「ヘーラー、と呼ばれているわ」

「ヘーラー……?」

紗依李はきよとしたような表情でまじまじとヘーラーを眺める。彼女は名前こそ外国人のようだが、見かけは日本人そのものだ。その疑問がわかったのかヘーラーは口元にクスリツと笑いをこぼした。

「この姿はあなたが日本人だからよ。……駄目よ」

突然の内容の転換に紗依李が目を白黒させると、ヘーラーは紗依李の前に膝をついて紗依李の目を覗き込んだ。

「駄目よ。それ以上闇に囚われては駄目。……あなたはまだ引き返せるわ。人を憎み、大切なものを切り捨てるにはまだ、早すぎるわよ」

「……あなたは……誰……?」

澄と同じ空気を纏った彼女に全てを見透かされている様で、紗依李の喉がからからに渴いた。

「ヘーラー。ヒトは我々を神と呼ぶわね」

「神・・・」

本来ならば冗談だろうと笑い飛ばすようなその言葉を紗依李は笑い飛ばす事が出来なかった。人の理解の及ばない何か、この世界にはある。それは、紗依李の力を持ってして証明してしまっているようなものだ。

「澄も・・・神・・・？」

「いいえ。彼女は違うわ。ヒトでも無いけれど・・・。笠原源は本当に信用できないの？」

「だって・・・源は・・・」

「なら、彼の本音を見て見ましょうか。誰かにゆがめられた情報ではなくて。」

目を見開く紗依李の目の前に水の塊がぽっかりと浮き上がった。そこに2人の人間の姿が見える。

13：神の領域？（後書き）

み・・・短い・・・。前回の続きなので、ここまでで。

14：闇

「澄・・・紗依李は・・・」

屋上の入り口から顔を覗かせた源は紗依李の姿を見ると軽く息を呑んだ。ぐったりと倒れこんだ紗依李を抱えた澄は、源を手招きで招き寄せる。

「何が・・・あつたんだ・・・？」

かすれるような声で訊ねた源は、真つ青な顔をした紗依李をキツク抱きしめた。その様子は愛おしいものを守ろうとしているようにも見えるが・・・どこか、歪んだ雰囲気をはらんでいるような気がする。

「笠原源。あなたに聞きたいことがある」

「何？」

「紗依李との間に何があつた？」

端的で無駄の無い問に源の表情が曇る。苦々しげに顔を曇らせた源に紗依李は小さく息をついた。

源が紗依李を大切にするのは、紗依李のためなのか、それとも自分のためなのか・・・その答えが今、わかる。

ギュッと掌を握り締めたまま、源は何も答えない。長い、沈黙。その沈黙を破つたのは澄だった。

「バカな!？」

空を見上げた澄の口から悲鳴のような声が漏れた。それにつられるようにしてオーディとルナ、そして源が空を見上げた。空は真っ黒に曇っていた。今は昼間で、別に雨雲がかかったわけでも無いのに、空を黒々とした何かが覆っている。

「何だ・・・これ・・・？」

「オーディ!？」

「無駄だ。ここまで来たらもう、お前と紗依李以外には正気を保てる人間はいない。・・・それに、浄化してしまわなければ必ずみを抑える事は不可能だ!？あの・・・女・・・やりやがった!？」

オーディの声にも焦りが見える。澄が始めてみた焦りの様子だ。

「浄化・・・紗依李は・・・!？」

澄の声にオーディが頷く。

「無理だ。一度落ちかけたあいつをこちらに引き込む危険は冒せない。」

「なら、どうしろと言つのよ!？」

逡巡。だが、オーディはすぐに答えを出した。しゃんと立ち上がった黒猫がまるで、自分よりもずっと大きな存在に見えた。

「アテーナー。お前は神界に戻れ。……お前の力を最大限に使って解決策を探せ」

「よろしいのですか？ゼウス」

この世界での仮の名“ルナ”ではなく、わざわざ“アテーナー”の名を使うと言う事は、普段は禁じられ、封じられている神の力を最大限に使うと言う事。それは禁忌を意味する。

「構わん。今回は俺の判断ミスだ。すべての咎はおれ自身で負う。行け」

神の言葉は強い言霊を持つ。彼が、神の王であるゼウスが発した言葉をたがえる事は出来ない。

「御意」

深く一礼したように見えた白猫は次の瞬間には姿を消していた。

「澄。お前はこの2人を連れて森へ行け。その場所なら聖域となっているから、力は受けない。……急げ！？源はもう持たぬぞ」

怒鳴りつけられ、呆然とオーディ、否ゼウスを見守っていた澄は慌てて源と紗依李の腕を取った。

風に、自然の空気にもてるすべての力をこめる。

《風よ！？お願い！？》

ふわりと強く強烈な風が体を取り巻き、屋上から澄、源、紗依李

の姿が消えた。

澄が消えると同時に、黒猫が忽然と消え、その場所に1人の男がいた。神々の王、ゼウスが人間界に降り立った。ゼウスは端正な顔つきを深い氣にゆがめ、軽く目を瞑る。

正氣の人間はやはりいない。深々と息をついたゼウスははたと動作を止め、慌てて目を上げた。

“来須まもり”と“来須明菜”はいまだ正氣を保っていたはずだ。この空気の中厳しくとも、今までの紗依李の力も残るあの2人がそう簡に正氣を失うとは思えない。

「一か八か、行ってみるか」

この空はまだ学校の中だけのはずだ。もしも今日彼女達2人が学校を休んで家にいたのだとすればあの2人を保護する事ができるかもしれない。昨日の今日なのだから休んでいたとしても不思議はない。

思考を巡らせていた時間は一瞬にも満たなかった。ゼウスは心を決めるとトントと地面を蹴った。何の音も無く、ゼウスの姿がその場から消える。

「これ・・・は・・・」

ゼウスは啞然と目を見開いた。来須家の家の周りには、清浄な気が満ちている。淡い光に包まれた家に触れようと伸ばしたては強い力を持って弾かれた。神であろうと魔であろうと、“異”なるものを弾くという強い意志が感じられる。

ゼウスでさえ入ることが出来ないほどの強い結界、そんなものをゼウスは始めて見た。それぞれの世界をどうやって作り、その世界がどういう性質を持つのか、ゼウスは自身が作ったものしか把握していない。ゆえに、これが何であるのか、この世界を作った男にしかわからぬことだ。

「アテーナー・・・ここで何があつたのか調べる」

声を神界に届ける。把握で来ていないこの世界の性質が、もしかしたらこの事態を解決する事ができる唯一の鍵となるかもしれない。

15：解決策の提示

時は遡る事、約1日。

まもりは、目を覚ますと自室のベッドの上にいた。どうやって帰って来たのか、思い出そうとしたがわからない。まもりにわかるのは香織に屋上から落とされそうになったことだけだ。どうやって助かったのかさえわからなかった。靄がかかったみたいに思い出すことが出来なかった。

「まもり!？」

階下から呼ぶ声にまもりはパチクリと目を見開いた。怒鳴りつけるような、轟くような嫌な声だが、それでも久しぶりに聞いた母の声だった。

まもりは転げ落ちるように階段を降りた。母親は居間にいた。冷たい目をしているが、でも死んだような目をしていた時よりよほどマシだ。

「お母さん!？」

駆け寄ったまもりの頬に鋭い痛みが走る。ガシャーーンと鋭い音がしてまもりの体が床に転がった。

「おか・・・あ・・・さ・・・」

「あんたさえいなければ・・・」

呆然と母親を見上げるまもりの耳に、憎しみのこもった声が聞こえる。あまりの光景にまもりは身動きひとつとることが出来なかった。

彼女の知る母は優しく、子供を・・・まもりのことも明菜のことも大切に愛してくれていた。友達のように、それでいて確かに親なのだと感じさせてくれた。数ヶ月前に突然部屋から出てこなくなったときも、時間が経てば元の優しい母親に戻ってくれるものだと信じて疑わなかった。だが、部屋から出てきた母には既に過去の面影は無い。

「あんたさえ・・・」

冷たくて細い指がまもりの首に巻きつく。首に圧力がかかり、息が苦しくなってきたが、抵抗する事はできなかった。どうして・・・こんな事になったのだろう。そんな問がむなしくまもりの頭を駆け抜ける。

まもりは意識を失う寸前、扉の前で立ちすくむ妹の姿を見たような気がした。

「ただいま・・・」

中からは何の返事も無い。期待していたわけではないが、やはりどこか落胆してしまう。昔は必ず母が答えてくれたものの・・・と。

何かがぶつかるような音が居間から聞こえた。居間の中に2人の人間の影が見て取れると、明菜は軽く眉を顰める。父親は未だ仕事の中で帰ってきていない。可能性があるとすれば、母親が外に出てきた場合か客が来ている場合。どちらもありえないような気がするがとにかく居間には2人の人間がいるはずだ。

「お姉ちゃ……」

居間の戸を開けた明菜はあんぐりと口を開いた。母がまもりの首を絞めている。その表情は憎しみが浮かんでいて、まるで知らない人間のように見えた。

なんで、こんな事になるのだろう。学校も町も……そして家族も皆おかしくなってしまった。

戻って欲しい。昔の優しい人たちに、戻って欲しい。

「……めて……。やめてー！ー！？」

明菜の声が居間に響き渡った。

パチンツと何かが体の中ではじけた。強い光があたりを照らす。それはまるで明菜の中からあふれているかのように見える。

「おねが……い……」

明菜はもう、自分の声を聞くことが出来なかった。急速に意識が闇に引っ張られ、もう何も考えられない。

「何・・・今の・・・」

呆然と呟くアテーナーの声が、がらんとつのように響き渡った。
深い闇が蠢くのがわかった。

ここは普段アテーナー達が住まう神界のさらに奥にあり、これよりも進むと罪人を裁く狭間・・・人間がいうところの“地獄”が待っている。その狭間の側にあるこの場所に好んで訪れるものは少なく、アテーナー自身長い年月神として生きながらここまで来たのは初めてだ。

《ゼウスは・・・再び禁忌を犯すつもりか？》

闇の中から声が聞こえた。全体に響き渡るその声がどこから聞こえてくるのか、アテーナーは考えようもしない。

考えるだけ無駄だという事は彼女は知っている。時の神クロノスとはこの場所の空間全て。アテーナーは彼の腹の中にいるといっても過言ではない。

「クロノス・・・。禁忌を犯したのはゼウスでは・・・！？」

「・・・俺が犯した禁忌の咎はすべて俺が負う。同じ失敗は繰り返さん。」

アテーナーの声を封じ込めるように背後からゼウスの声が響いてきた。2人の偉大な神に挟まれたアテーナーは口を挟む術すらも失い、2人の会話に耳を傾けるしかない。

《今、王を失うのがよいこととは思わぬが？》

「俺の不在は他が埋める。本当はあの時にもそうすべきだった。」

ザワリツと闇が揺れる。まるで笑っているようだ。

《そうは思わぬ。後が無い以上力を残さねばならぬ。……だが、この世界をこのままにしておけぬのもまた事実……か。》

ゼウスが強い瞳で、闇を見据え、頷く。このままでは、この世界のひずみはひとつの世界を飲み込み、全ての世界を破壊する。その場所に存在するのは混沌の無だ。すべての力をかけて作った世界が消えればここ、神界もどうなるのかわからない。完全なる未知……だ。それだけは防がなければならなかった。……そのために何を犠牲にしようとも。

「俺のやる事はひとつだ。ここを通してもらう」

「！？ゼウス！？」

意味を理解したアテーナーが慌てて静止の声を放つが、それは静かです。そして、力強いゼウスの瞳に止められた。冷酷で、残酷な王。目的のために人を、神を利用する事を厭わない王。だが、すべての世界を愛している王。心を決めた彼を止める手立ては誰にも無い。アテーナーはもちろん、ゼウスよりも強い力を持つクロノスでさえも。

暗闇が揺れ、ゼウスの姿が見えなくなる。

《アテーナー、そなたは戻れ。王を信じるのなら、そなたには他にやらねばならぬことがあるのでは無いか？》

クロノスの声に突き動かされるようにアテーナーは静かにその場から姿を消した。

うごめく闇の中に立ったゼウスは迷うことなく一人の男の前に立つ。檻の前で時折襲う痛み of 波に耐えるかの様に顔をしかめている彼はゼウスに気がつく、軽く体を揺らした。何千年もの長き年月ずっとこの地にいた彼にとって久方ぶりに接するまともな者、それがゼウスだ。

「ゼウス……。」

かすれた声は彼の状態の苛酷さを如実に表しているような気がした。

「タンタロス、お前に聞きたいことがある。……今、お前の作った世界は……」

ゼウスは坦々とした口調でタンタロスにあの世界の現状を説明した。あの妹が発した不思議な光とまるで結界のように他者を受け入れようとしなない光の話も。

じつと聞いていたタンタロスは深く息を吐いた。

「……情報を提供するのには問題はありませんし、解決策も提示できます。……が、条件があります」

ゼウスは無言で先を促した。王としてその彼の条件を呑むことが出来るかは解らないがここで突っぱねる事は世界の終わりを意味する。

「香織を……水原香織の許しを」

ゼウスは目を見開いた。そんなこと、出きるはずが無い。彼女を許すくらいならばタンタロスを許す方がまだ可能だ。香織は過去はともかく今は悪の権化。彼女を許せばこれから先何度あの世界に危機が訪れ、すべての世界を飲み込むかわからない。今の状況も彼女が作ったといっても過言ではないのだ。だが、タンタロスは違う。情が厚く、身内を大切にする。だからこそ起こった悲劇と言っても過言では無い。

「無理だ。アレは、やりすぎた。今更……」

「あなたが危惧する事は起こらないと約束します」

まっすぐにタンタロスの瞳は口からでまかせを言っているようには見えず、今は信じることにした。

「解った、善処しよう。で？」

完全な約束ではない事にタンタロスも気づいたのだろう。それでも口を開いたのは、危惧する状況が起こらないようにする方法に絶

対の自信があるからなのかもしれない。

「あの力は……」

タンタロスが口にした力の内容と解決策にゼウスはあんぐりと口を開いた。確かにその方法ならばすべての問題が解決する。それどころかひずみの存在すら消えてなくなるかも知れない。だが……

「無茶だ!？」

ゼウスの怒声にタンタロスは軽く首を振った。

「いいえ。本当はあの時に……いや、あの時は無理か、でもあなたの秘蔵つ子が世に出た時にこうするべきだったんだ。こうすればこの事態を完全に収めることが出来る」

「それなら、俺が……」

「いいえ。あなたは王です。あなたの不在を埋めることが可能ならば私の不在も埋められるはず。……方法はこれしかありません。これなら、香織を許す事も可能でしょう?」

ゼウスは反論の言葉を持たずにうなだれた。人を傷つけて自分まで傷ついている優しい少女の顔が浮かぶ。だが、結局反論する事はできなかった。彼の言う事は正しい。今は、決断すべき時だ。

16：戻ってきた少女

「笠原君」

澄はこの森に来てから呆然とあたりを見回している源の前に腰を降ろした。彼らのすぐ側には意識の無い紗依李がいる。

「澄・・・お前、何者だ？」

その表情にも、声にも拒絶の色も、恐怖の色も無い。普通ならば拒絶するであろう状況を簡単に受け入れているあたりは、紗依李を受け入れた源ならではといえる。

「・・・まだ、私の質問に答えていない」

澄のその声は、決して逃げる事を許さない強さが、あった。源はじつと何かに耐えているようだったが、悲しげに顔をゆがめ、紗依李を見ると、弱々しい声で語りだした。

沈黙が・・・何も思い出さないことが紗依李のためなのだと思っていた。でも、本当は違う。・・・ただ、怖かったただけだ。自分を守りたかった・・・それ・・・だけだ。

「俺は、昔紗依李を傷つけた。俺が・・・馬鹿だったんだ」

源の脳裏に感情の無い能面のような表情が浮かんでは消えていく。ポツリ、ポツリと語る源の表情は今にも泣きそうで、澄は口を挟む事さえ出来なかった。

いつからなのかは覚えていない。ただ、物心つく頃には紗依李はいつも1人だった。あいつの両親も、俺の両親も、誰一人紗依李を庇い、抱きしめる人間はいなかった。

「源、紗依李ちゃんはね化け物なの。いい？あの子に関わってはだめ。ろくなことになるわい」

そんな言葉を毎日挨拶代わりに聞いていた。

“紗依李は化け物” “紗依李は人ではない” それは、俺にとって何よりも正しい真実だった。

「げ……源……。おはよ……」

「げげげ。アイツに話しかけられちゃった！！メチャクチャキモイ！！」

ほんの少しの言葉に過剰に反応した。初めのうちは震える声で、挨拶をしてきた紗依李も次第に誰とも話をしなくなった。

「源？お前何やってんの？」

「この頃面白い事ないじゃ」

ニヤリと笑った俺は手に持っている数冊の教科書をクラスメイトの前に出した。油性マジックででかでかとかラクガキがしてある。表紙だけではなく教科書の中身にも。読めないページさえあるほどにびっしりと。

ザワザワとざわめく彼らに俺は数本のマジックを渡す。

「お前等もやる？」

目を見交わす彼らが、一人ずつおずおずとマジックを手にする。それが、始まりだった。その日から紗依李に対するいじめが始まった。

家に帰ると隣の家から怒声が聞こえる事もあった。“教科書を駄目にした”“制服を汚した”。そのすべては紗依李のせいではないのに紗依李の両親にとって誰が原因かは関係がなかったのかも知らない。ただ、ストレス発散が出来ればよかった。・・・サンドバツクにされて泣き叫ぶ紗依李の声に耳を塞いだ。

そして、それから2年ほど過ぎた・・・小学校6年生の時。あの、運命の日が来た。全てが終わり・・・そして始まったあの日が。

シンとあたりが静まり返る。澄は何も言わない。責める事もせず

に源のほうを見ているだけだ。

「俺……は……。紗依李をいじめて、殺した。だから、俺がいじめに会ったのはしょうがないって思う。……きつと罰が当たったんだ……。でも、紗依李は違う。ずっと苦しんできた。それなのに人を攻撃したりしたい……。そんな紗依李がもう一度苦しまなきゃいけないなんて……。俺は……。」

「笠原君……？」

澄の言葉に源は、ハッと顔を上げた。溢れてきそうな涙を何とかこらえる。

「悪い……。初めに傷つけたのは俺……。なんだよな。俺にこんなこと言う権利なんてないけど……。でも……。」

「後悔しているんだ。そして、今きつと誰よりも紗依李の幸せを願っている」

源はそれには頷かなかった。ただ、紗依李を見つめる優しい瞳と、手を握り締める仕種にその答えの全てが詰まっているように、澄の目には見えた。

水鏡の向こう側の光景を黙ってみていた紗依李はハラハラと涙を流した。さっきまではつきりと見えていた光景が今はよく見ることが出来ない。世界が歪む。その視界はまるで紗依李の世界の样だった。さっきまで確かだと思っていた世界が今は歪んで崩れてしまっている。

「笠原源は信用できない？」

ヘーラーの声が優しく耳を打つ。源が紗依李を騙していた事は事実だ。紗依李の記憶のことも、紗依李の過去も全てを知っていた上で黙っていた。でも、それは悪意ある行動なのか、それとも紗依李のためを思つての行動なのかわからなくなってしまった。

紗依李は弱々しく首を振った。

「わから．．．ない．．．よ．．．」

涙が喉に詰まって上手く言葉が出てこない。優しい源。鬼のような表情をした源。．．．過去の様々な光景が蘇っては消えていく。．．．その中で最も鮮やかに残っているのは．．．過保護な源。

「解らない．．．けど．．．。源が優しかったのは事実だから．．．。それがすべて演技だったなんて思いたくない．．．」

紗依李の言葉にヘーラーは軽く目を見開き、そして優しく笑った。本当に楽しそうな声が当たりに響き渡り、紗依李は涙に濡れた目をヘーラーへ向ける。

「それでいいじゃない。もう、答えは出ているんでしょう？確かに昔の笠原源はあなたにとっては敵だった。でも．．．今の彼はあなたの味方。あなた自身がそう思っているんじゃないの？」

それを紗依李は否定できなかった。その表現が最も的を射ているような気がする。

「話してみなさい。怖いかも知れないけど．．．今のままでは双方立ち止まったままよ？」

紗依李は強く、キツク手を握り締め、コックリと頷いた。

「・・・・・・・・源と・・・・・・・・話す」

覚悟を決めた紗依李の目は強く、人は本当に少しのきっかけで強くなれるのだということを物語っていた。その様子にヘーラーたちが嬉しそうに笑った。

紗依李はその光景を最後に、その場所での記憶が途切れ・・・・いつの前にか澄と源の顔を見上げていた。

「「紗依李!?!」」

2つの声が紗依李の耳に響く。何を言うのかグルグルと迷った拳げ句ひと言、笑みと共に告げた。

「ただいま」

17：世界

思ったよりも元気そうな紗依李の言葉に源がヘナヘナと座り込んだ。表情に安堵の色が浮かんでいる。

「ごめんなさい」

「紗・・・紗依李が謝る事なんて無い!？」

源の口から大きな声が出た。紗依李と澄は突然耳を打つ騒音にビクリと体を震わせる。

「あ・・・悪い」

罰の悪そうな顔をした源の目を紗依李はまっすぐと見つめ・・・
爆弾発言を放った。

「源。私、全部思い出したよ」

「え・・・」

スツと源の顔から表情が消え、戸惑ったような・・・それでいて悲し気な表情をその顔に浮かべる。でも、紗依李が懸念していた嫌悪や憎悪といった過去の表情が源の顔に登る事は無かった。

「ありがとう、源」

安堵のあまり柔らかな笑みを浮かべる紗依李を源も澄もわけがわからないというように見つめていた。源に至っては全く持って意味

不明だ。責められるいわれはあっても、お礼を言われる理由はない。

「紗……紗依李……？」

「熱なんか無いって」

思わず紗依李の額にコツンと自分の額をぶつけてきた源に紗依李がクスクスと笑みを漏らす。

その様子を澄は困ったように見つめてから、溜息を吐いた。

「私がいること……忘れないでもらいたいんだけど……」

「「あ……」」

慌てて離れる彼らを澄がじろりと見下ろす。

「ねえ、あんた達本当に付き合っていないの？」

「「付き合っていない」」

同時に否定するその様子は全くもって説得力が無い。

「で、さ。澄、お前何者なんだ？」

源の問に澄は考え込むように顔を顰めたが、すぐに軽く頷いた。ここまで来た以上隠し通す事は出来ないだろう。

「紗依李、どこまで話したっけ？」

「ほとんど何も。ただ、この学校を元に戻しに来た・・・とだけ。あと・・・ヘーラーって人が“澄は神ではないけれど、ヒトでも無い”・・・と言っていたけど・・・」

戸惑ったような紗依李の言葉に澄は一人の女性を頭に思い描いた。

「ヘーラー・・・ね。昔話なんだけど、神々が一人一つづつ世界を作ったの。今、私たちがいる世界もそう。それらの世界は交わることなく同時に存在している。・・・人がいうところの“異世界”だと思ってくればいい。・・・均衡を持って存在していた世界は一人の神の行動によって姿を変えた。」

「？」

「タンタロスという神が自分の世界に下りたの。それは、まあ、別にいいんだけど・・・問題はそこで自分が作った人間と恋に落ちて子をなしたこと。・・・神と人が交わる事で均衡が崩れた。ひずみが現れるようになって・・・そのひずみにやられた人間は皆狂っていく。」

「・・・・・・・・・・もしかして、私が見た黒いものは・・・？」

「ひずみに犯された人間。私はそのひずみを消して元あるものに戻

すために来た」

「ひずみが消えたらどうなるんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・関わった人間の記憶が消えて・・・・後は何の変わりも無く進んで行く」

「今、空を覆っているのもひずみなのか？」

その間に澄は軽く眉をひそめた。それは、いくら聞かれても答えようが無い。澄にも訳がわからないのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・それは、解らない。恐らくオーディーが調べてくれると思うんだけど・・・・」

「オーディーって黒い猫？アレ、何なんだ？」

「・・・・・・・・それもよく知らない。ただ、私の庇護者かな。雇い主と言ってもいいけど」

顔を見合わせた彼らの側に一人の男が音も無く降り立った。見覚えの無い男に澄、紗依李、源が訝しげな表情を浮かべた。

「・・・・・・・・その質問は俺が答えよう」

その声は澄にとって間違えるはずも無いほど身近で聞き続けてきたものだった。

「オーディー……?」

啞然と呟いた澄の言葉にオーディーが軽く頷いた。人型をした彼は、猫であつた時の何倍も存在感があるようだ。

「それは、お前が付けた名だ。……本名は……ゼウス。聞いたことくらいあるだろ?」

オーディー……否、ゼウスは彼ら三人を見回した。三人は皆、あぐりと口を開いて、彼を見つめていた。

「ゼウス……て……あれ?ギリシャ神話の主神」

「ああ」

ゼウスが頷くと、澄がその場にへたり込んだ。啞然と目を見開きゼウスの姿を見ている。その予想通りの反応にゼウスは軽く失笑した。そして、すぐに笑顔を消す。ゼウスのお願いを聞いた時の澄の顔を思い浮かべると笑っている事はできない。

「何で……そんな人が……」

「部下の不始末は上司が消すべきだろう。……そのためにお前を作ったんだからな」

澄の顔を見て坦々と告げる。紗依李と源が息を呑むのが解つたが、今は彼らを気にしている余裕は無い。

「私を．．．作った．．．？」

「そうだ。お前は俺が、このひずみを消すためだけに、力の一部を変換して作った．．．そんなお前に最後の仕事を与えてやる」

ぼんやりとゼウスを見上げる澄の顔からは表情が抜け落ちていた。その様子が痛々しくて、これ以上何も言いたくは無。い。だ。が．．．ゼウスはそれを許されない場所に立っている。

「最後の仕事．．．お前には今回の権の諸悪の根源、タンタロスを消してもらう」

ゼウスの言葉が沈黙に支配されたこの場の、新たな支配者になった。

18：最後の仕事？

「タンタロスを……消す……？」

澄にはゼウスの言っている言葉が理解できない。タンタロス、すべての始まりの神。悪と噂される神であつたとしても、相手は間違はなく“神”……だ。それを殺すことなどあり得ない。

「ああ。……神による同族殺しは絶対に犯してはならない禁忌だ」

ストン、とそれだけでゼウスの言葉が理解出来たような気がした。全てを理解したわけではないが……今の言葉でたった一つだけ分かることがある。

「わかった」

澄は何とか顔にいつもの表情を浮かべるとコクリと頷いた。そして、見上げたゼウスの瞳が悲しげに揺れたような気がしたが、その真意は分からない。

「待つて!？」

頷いた澄に意を唱えたのは紗依李だつた。困惑したような表情で、でも今の澄の判断は納得が出来なかつたのだらう。

「なんで……澄なの？澄は神の力を持っているんでしょう？だつたら、澄でもいけないんじゃない？」

「私は神では無い。力を持っていたてもこの肉体はヒトのものなの。でも、ヒトでもないから・・・神を殺すことが出来る唯一の人間。・・・全てを終わらせる事の出来る唯一の方法。ここまできたら、今は新しい方法を試すことも、考えることも出来ない。・・・だから《眠って》」

力をこめた澄の声を聞いた紗依李と源の体がその場に倒れこんだ。

「巻き込んでごめんなさい。紗依李、笠原君。・・・でも・・・ありがとう」

そう彼らに語りかけた澄の声は澄んでいて、これから先の運命をすべて受け入れているような、そんな口調だった。

「オーデイ。行こう」

澄の顔から人間らしい表情が綺麗に消えていた。その痛々しい様子をゼウスはまっすぐと見ることが出来ない。

「・・・ああ」

澄とゼウスを淡い光が包み込み、その光が消えた時、そこに澄の姿は無かった。

強い光を目の奥に感じた紗依李は慌てて飛び起きた。澄の最後の言葉が耳の奥に蘇ってくる。

隣で意識を失っている源の頬をそつと撫でた。色々なことがあったけれど、源と共に生きてきた年月は確かにここに存在した。源が居たからこそ今の紗依李がある。

「また・・・皆で笑いたいな」

源と紗依李と澄の三人で共に歩みたいと願う、その願いはおそらく一生叶わないものだろうけれど、願わずには居られない。

“パン”と乾いた音が当たりに響き渡った。澄は全てを終わらせるために覚悟を決めた。それならば、紗依李も自分のできることをしなければいけない。再び、誰も欠けないで元の形に戻すために、この力が役に立つというのなら、それだけで紗依李が生まれてきた意味がある、きつとそう思えるようになるはずだから。

小屋の外に広がるのは真っ暗な闇だった。一歩足を踏み出すだけで頭が痛く、ふらふらになる。

『願いは力よ。』

《眠って》

ルナの言葉が・・・澄が力を使う時に呟いていた言葉が頭の中に反芻している。今まで知らなかった力の使い方。でも、今ならわかるような気がする。

「・・・お願い私に力を貸して。私をあの人の所に・・・水原香織のところに連れて行って」

光が紗依李の元に集まってくる。光が彼女を包み、それが消えた時紗依李は小屋ではなく闇に吞まれた家の前に立っていた。それなのに、不思議と不快感は無い。すっきりと安定した気分だ。

紗依李は迷うことなく目の前の扉を開けた。真っ黒な闇の中に楽しそうに笑う彼女の姿が見える。

楽しそうに笑う彼女のすぐそばに大きな黒い穴が開いていてその中に人がいる。どこと無く香織と似ているような気がする。

「いらつしゃい。・・・見て、すごいでしょう？私の勝ちよ。」

そんな紗依李の表情にゾツと背筋が寒くなる。恐ろしさに体が震

えた。

「それは・・・誰？」

「これ？私を産んだ人。」

紗依李は顔を顰めると、無意識の内にその穴に手を入れて彼女をこちら側に引き抜いた。ぐったりとしているが、浅い呼吸から生きていることが分かる。

「こんな風に彼女を傷つけてもあなたの受けた傷は消えない」

紗依李は香織の母親を床に寝せると、香織に近づいて力いっぱい抱きしめた。

「な・・・！！？何を・・・。」

「私はあなたと似ている。親に疎まれ、人に嫌われ、孤独の時を生きた。でも・・・たった一つ違いがある。私にはわかうとしてくれた人がいた。」

源の顔が脳裏をよぎる。彼がいなければ、今、ここでこうしてたっていたのは紗依李だったかもしれない。

「私が・・・あなたの手を取る。私があなたの苦しみを半分受け取る。だから・・・もう、こんな風に人を傷つけ、自分を傷つけるのはやめて。」

まん丸に目を見開く香織の体を尚、一層強く抱きしめた。そうすることで、彼女を繋ぎとめようとするかのように。

紗依李の体から溢れる光が、香織を包み込む。光が消え、ぐつたりと倒れこんだ香織の表情は見たことも無いほど、穏やかで、柔らかな笑みさえ浮かべている。

窓の外が強く光り、その光は紗依李と香織の体を包み込んだ。香織の手を握り締めたまま、紗依李は意識を失った。なんとなく心に浮かんだ幸せな思いをかみ締めるかのような、そんな満ち足りた表情を浮かべている。

「澄・・・ありがとう」

呟いた声を最後に紗依李の意識は闇に消えた。

19：最後の仕事？

光が収まった時、澄が連れてこられたのは見覚えの無い場所だった。あたり一面草原となっており、草が生い茂っている。だが、そこに人の気配も動物の気配もしない。その様子は神々の領域と呼ばれるあの場所と酷似しているように見える。

「ここは・・・？」

「神々の領域の中で最も私の世界に近い場所だよ」

澄の問に答えたのはゼウスではなく見知らぬ男性だった。彼が、恐らく“タンタロス”なのだろう。穏やかな笑みを浮かべた彼の表情は穏やかの中にも力強い何かがあつて、その様子は彼の今までの苛酷な運命を思わせている。だが、彼は禁忌を犯し、世界を破滅へ追いやった悪には見えない。それどころかとても穏やかなヒトのことを大切にしている神に見える。

「あなたが・・・タンタロス・・・？」

澄の声はぼんやりと漂い、空間に消えていった。だが、タンタロスはそのかすかな声を聞き取ったかのように頷いた。

「そうだよ。・・・君に苛酷な運命を与える事は申し訳が無いと思っけど・・・お願いできるかな」

「あなたは、それでいいんですか？」

別に何をしたかったわけでは無いが、気がついたらそんなことを

聞いていた。それ以外に方法が無い以上どうしようもない事なのに、どうしてもそれが正しい事だと思ふことが出来ない。

「私は・・・禁忌を犯した。禁忌と知っていて自らの欲望を抑えられなかったんだ。その咎は受けるべきで、その結果訪れた混沌を正す事が今できる唯一の償いだ。・・・“タンタロス”の役割は俺の血を引くあの子達のどちらかが引き継いでくれるさ」

ニヤリと笑う彼の言葉に澄が驚く事は無かった。心のどこかでその可能性を考えていた。紗依李と香織。その二人が力を持つ・・・。本当の理由を。

澄は覚悟を決め、深く深呼吸をした。澄の体が強い光を発し、あたりを覆った・・・と同時にそれを上まわる強い光をタンタロスの体が発した。二つの光がぶつかり、大きな渦となつて爆発する。

澄の姿も、ゼウスの姿すらその光の中に消え、視覚で捉える事が出来ない。

エピソード：新たな世界

ピンポン、けたたましいチャイムの音に紗依李がパンを喉に詰まらせ、軽くむせた。その背中を源が軽く叩いてやる。

「大丈夫か？」

「もっちゃん。・・・早く行こ！？」

パツと笑みを浮かべると小走りに玄間に向かう。それを源はほっとしたような表情で眺めた。あの時はもう、二度とこんな日が来ないかと思っていたのに。再び紗依李の笑顔を見ることが出来た。それに・・・。

「源~~~~！？早く~~~~。澄と香織先輩が待つてるよ！？」

「今行く」

小走りで玄間に向かった源に澄が呆れたような表情を浮かべた。

「また、こっちに居たの？何かあなた達、本当に夫婦みたい」

「いつそもう籍入れちゃえば？」

にこりと笑う香織は、本当に暖かな笑みを浮かべていて、本当に綺麗だった。あの“水原香織”にこんな表情が出来るとは思っていなかった。

「まだ無理でしょう？源は18歳になっていないし」

クスクスと笑う澄の顔の横で真っ黒な髪の毛がサラサラと揺れた。

「冗談よ、冗談。澄って本当に冗談が通じないわよね」

「私に普通の人間を求めないで。」

軽く息をついた澄は、ふと口をつぐんだ。もうじき交差点に指しかかろうとした時、信号待ちをしていた学生服の男がふりむいた。見覚えのある顔が、そこにいた。

「オーデイ・・・・・・・・・・」

「久しぶり」

軽く口角を上げるようにして笑った彼は、澄がよく知るオーデイこと、ゼウスそのものだった。

「オーデイ!？」

飛びつくように抱きついた澄をオーデイが抱きとめる。その様子を彼らは楽しそうに眺めた。

「よかった、澄のあんな顔久しぶりに見たよ。」

紗依李の言葉はそこに居るすべての人間の想いを代弁している。

「最後の最後で、やってくれたわね」

水鏡から下界を見下ろしていたアテーナーがどこか嬉しげに微笑んだ。タンタロスは最後にすべての魔力を開放した時に三つのとんでもないことをしてくれた。

一つ目は、オーデイが覚悟していた“咎”を無にする事。いや恐らくはタンタロスが肩代わりしたのだろう。そして、二つ目は澄とオーデイに人間としての生を与える事。その代償は決して安くは無いが、それでも、今笑っていられる事は幸せだと思える。そして、最期にすべてのひずみを消してしまう事。

アテーナー達はそこまでのことを期待していたわけではない。これが終われば澄とオーデイは再び終わり無い旅をするはずだった。その全てをタンタロスが命を賭けて終わらせた。

「ゼウス、これでよかったの？」

「………仕方がないだろ。タンタロスの抜けた穴は埋めなければならぬ。あの三人は三人揃って漸く一人前の力が使えるんだからな。」

そう、その代償は………澄、紗依李、香織の三人の人としての生を終えた後の永遠の時。その大きな代償を払うに値するだけの幸せな時を過ごしてほしいと、アテーナーもゼウスも心から願う。

「澄、紗依李、香織。どうか幸せに」

ゼウスとアテーナーの声は彼らには届かない。

エピソード：新たな世界（後書き）

完結です。ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。
多分この話しはもう書かないと思います（何年も前に書いたもので、
既に設定とか頭に残ってないので・・・）

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7266u/>

Dark Town

2011年9月26日09時21分発行